

あとがきにかえて

日本人論、日本文化論の本が書店のコーナーにあふれている。こうした現象自体も検討に値すると思われる。なかでも人気があるのは青い目の日本観であるようだ。長い間鎖国を強いられた島びとたちは、その片言隻句にも神経を尖がらせやすく、おのずから長耳飛目の習性を身につけた。その末裔たちが、きっと耳を立ててウサギ小屋で黒い目をむいたとしても無理はない。いみじくも E. O. ライシャワー博士が仰ったように、日本人は深い不安をいだいている、日本は世界の中でどう評価されているのか、とたえず気にしているのである。これと同じ心根から、われわれは海外においてはもとより、国内で外国人と付き合う時でも、まるで日本を代表しているかのように振舞いがちである。

このような態度は、自分が属する集団との強い一体感から生じる。集団の結束性、一体意識が固すぎると、集団のウチとソトとの峻別、集団的排他性、集団のエゴイズムが強まるものである。このような社会においては、異なる集団にそれぞれ属する人々の間の交際は、まるでそっけなく、ぎこちないものになりやすい。ましてや外国における集団の一体性が強いという特性は、しばしばイエ意識の擬制的拡張に基づくものと説明されている。しかし、なぜにイエ意識が強く保たれて、それが社会的結束原理にまで発展したのかという理由は、まだ解明されていないようである。この問いに対する仮説的卑見を述べるのが許されるならば、それは日本の社会を支え、大多数の人々の生活を律してきた米作によって必要不可欠であった水利共同体の強靱な媒介によるものであると言えそうである。このことについて論じるのは別の機会にゆずるが、ともあれ、集団的排他性あるいは孤立性が強い日本人が、現代のような国際化時代に直面して、以前にもまして外国人からとやかく批評され、自らも進退にとまどいをおぼえ、自虐的あるいは自讃的日本人論に花を咲かせ、出版界を賑わせているだけでは芸がない。

“百論は一験”にしかずとか、地理学は本来グローバルな学問であるし、日本の現代社会の実態や新旧混合した文化の特徴をよりよく理解させ、国際理解と親善を深めるためにも、このあたりで日本全国を舞台として IGC、すなわち国際地理学連合 (IGU) の本会議と総会、それと不可分の臨検的研究集会、移動研究会を開催した方がよいと判断して、その誘致に加担したわけである。とはいえ、何しろ百年以上伝統があり、参加国数は 60 をこえ、内外の参加者は 2,000 名を下るまいとの予想があったので、数年にわたる開催準備のために費された労力は計りしれず、財政規模は 1 億の大台にのぼった。昨年の 8 月下旬から 9 月中旬にかけて、IGC の多種多彩な仕事の運営にあたった実行委員と協力者たちは、それぞれ夢我夢中で過したのであった。

田辺裕助教授は、IGC 組織委員会の専門委員を勤めるとともに、IGC の応用地理学ワーキンググループの研究集会を組織した。横浜を中心に行われた集会の成功と、IGU 副会長の木内信蔵先生の御支援もあって、向う 2 期 8 年間の同ワーキンググループの委員長に選ばれた。山口岳志助教授は、同じく組織委員会の専門委員を勤めるとともに、IGC の数多いコミッションの中でも代表的な一つである“国土集落システム”研究委員会の委員として、その研究集会を札幌と仙台を舞台にして組織した。これには錚々たる内外の学者たちが多数参加し、活況を呈した。当研究委員会の目標は、大小の都市の機能的、空間的配置関係に現われた国ごとの特色を国際的に比較研究することにあると思われる。西川

は、IGC の準備委員会の設置にあたって官房的役割を果し、同組織委員会の執行部の相談役として会長・副会長の補佐、募金活動等の支援にあたり、また「人間と環境」コミッションのコレスポンディングメンバーとして、その東京における研究集会の運営に協力した。IGC を記念する、日本地理学会の特別出版物「日本の地理」(英文 440ページ)の企画・編集にも参画した。

なお、9月10日(水)には本学部へ E. Dalmasso 博士(パリ第七大学教授、国際都市の総代表)を文部省の御援助によって招き、「パリ大学国際都市と大学都市の計画」と題する講演をしていただいた。

小林善彦教授と田辺助教授が世話役となり、聴講者は図書館の視聴覚教室を埋めつくす盛会であった。これに対しては磯田学部長や臼庭事務部長方の御支援を仰いだ。ともに厚く御礼申し上げる。また、10月3日(金)には、日本学術振興会が招へいした C. Harris 博士(シカゴ大学教授、同前副学長、IGU 名誉会員)を招き、国際関係論コロキウムで「シカゴ大学における地域研究プログラム」と題して講演していただき、つづいて熱心な討論が行われた。この企画を快諾され、司会を勤められた衛藤藩吉教授の御好意に対して謝意を表すものである。

今回の IGC についての評価は人によって異なるであろう。日本における地理学に対する認識不足や偏見を正す上に、果してそれがどれだけ有効であったかは不明であるが、60数か国から参加された 800人近い地理学者たちによる現代日本の各方面にわたる紹介の効果は、測り知れないほど大きいはずである。ともあれ、この大会を契機として、日本の地理学者が国際舞台において活躍する道が広く開かれたことを喜びとしたい。

1979年11月19-24日には、創立百周年を迎えた東京地学協会(社団法人)、および日本地理学会とスウェーデン人類・地理学協会の共催で「ノルデンショルド北氷洋周航百年記念日瑞シンポジウム—高緯度の自然と民族—」が開かれた。スウェーデンからは G. Hoppe 博士(王立科学アカデミー院長、ストックホルム大学教授、同前学長)、E. Bylund 博士(ウメオ大学教授、同前学長)、V. Schytt 博士(スウェーデン人類・地理学協会会長、著名な極地探検家)という最高峰の地理学者が参加され、東京と札幌におけるシンポジウム等は大変好評を博した。この実行委員会の事務局は当人文地理学研究室に置かせていただき、西川は同局長、三上岳彦助手(現在はお茶の水女子大学講師)は幹事を中心となり、無事大役を果した。

さらに今年の10月中旬には、国連大学と東京地学協会との共催で、「人類の発展と地球科学の役割」に関する国際シンポジウムを開くことになる。西川は東京地学協会の理事(行事委員長)として、湊秀雄・浜田隆士両教授と共に準備委員会の要となり、多くの委員方の御協力を得て企画を練りつつある。

国際会議関係の活動記録を先行させてしまったが、過去2年間における学内の各種委員勤めも決して少なかったわけではない。田辺助教授は、第三・第九委員、人文地理学学科主任(55.10—56.9)大学院設置準備ワーキンググループ委員等、山口助教授は、第七委員、人文地理学学科主任(54.9—55.9)等、西川は、教養学科第一委員長(54.10—56.9)三学科合同委員会議長(55.10—56.9)をはじめ、東京大学建築委員会委員、同長期計画特別委員会委員、教養学部建設委員会委員、大学院地理学専門課程主任(54.4—56.3)等を勤めている。

人文地理学教室の人事では、昨年春くらい田中のり子(現加藤のり子)さんの後任事務職員として相原順子さんを、昨年の4月1日付けで三上岳彦氏の後任助手として荒井良雄

氏を迎え入れた。この春には、教育学教室にかかわる助手として人文地理学分科出身の柴田匡平氏が就任することになる。人文科学科科会の御配慮に対して深謝するとともに同氏の活躍に期待したい。なお当教室には昨秋いらいシカゴ大学の院生 **G. I. Latz** 君が大学院地理学専門課程の研究生として在学中である。また、この2月には、韓国から慶北大学の洪 淳完教授が客員研究員として1年間近く滞在されるし、秋にはフランスから **S. A. Sandri** 君を大学院研究生として迎える予定である。国内からは内地留学生の申し込みが相つぎ、収容力の関係から止むなくお断わりせねばならない場合もあった。

本年4月には、教養学科の第一回生が進学してから30周年を迎える。このための記念行事を企画することになった。その創設当初から尽力された功労者の一人である木内信蔵先生は、昨年11月19日にめでたく古稀を迎えられた。人文地理学分科の中川章と田辺裕の両氏が幹事役となり、11月16日に先生御夫妻を囲む祝賀会を催した。卒業生、研究生や旧職員方が多数集まり盛会であった。初期の卒業生たちはすでに40台の半ばに達し、各方面において中堅幹部として活躍されている。こうした実績を心の糧として当教室の拡充に向けてますます努力せねばならないと思う昨今である。

1981年1月 西川 治